

舞踊学の動向

学校教育の側面から

松本千代栄

舞踊系の活動が、学校教育の「教材」⁽¹⁾として導入されたのは、明治5年学制が発布され、全国を八大学区に分けて学校が設置されることになってからしばらく後のことである。30年以降欧米の遊戯法の紹介はめざましいものがあり、舞踊系教材の研究・教育はこのあたりからはじまったとみることができよう。しかし、より厳密な意味では、昭和22年学習指導要綱が「表現技術、作品創作、作品鑑賞」の三内容を柱にして「ダンス」⁽²⁾をとりあげた時から、学校教育の中の舞踊系教材が、ひろく文化としての舞踊とつながるものとなり、体育の屬性としての教材研究から、文化としての舞踊研究に視点をひろげ得る契機をもったとみるできよう。

更に、舞踊の研究が、研究発表と討議の場を共有するようになったのは、日本体育学会の設立(昭・25)以来であり、大学教育の中に研究上の拠点として「舞踊学」⁽³⁾「舞踊教育学」⁽⁴⁾が省令講座として制度上にその名称をもったのは最近のことである。「舞踊学会」の設立(昭・51)とあわせ考えると、学校教育の場からその学としての成果を確実にするのは、まさにこれからであるとみなければならぬだろう。Wisconsin大学にはじめてPerforming groupが誕生し(1918)、ダンス専攻課程がおかれ(1921)、今日の全米の大学の舞踊研究と教育の拠点が開かれた時(修士課程1927、博士課程1963)と比較しても、我々は端緒についたばかりとみなければならぬだろう。

舞踊学の今後の発展に期待しつつ、今日までの舞踊研究の方向をまづ、日本体育学会「体

表Ⅰ 研究文献分類(日本体育学会発表) 昭和25～44年 谷村分類項目による(表作成筆者)

回数 年代 分類	昭和25～44年			
	1 第1回 S. 25 ～29	2 6回 S. 30 ～34	3 11回 S. 35 ～39	4 16回 S. 40 ～44
ダンス	4	19	16	16
舞踊	2	17	17	15
表現	5	2	35	24
創作	2	0	6	28
鑑賞	0	0	3	5
空間・配置・知覚	2	9	1	2
リズム	2	2	8	28
群舞	0	0	1	2
民舞	1	3	5	3
フォークダンス	0	1	0	6
伴奏音楽	0	0	1	19
その他	1	8	16	30
計	19	61	109	178

育学研究⁽⁵⁾を手がかりとして、量的、質的に概観してみよう。(この間の著作については、別項で執筆されることと考え、論文にしぼった。)

研究の概要

表Ⅰは、日本体育学会第1回から20回(昭・25～44)までの舞踊関係研究発表を谷村氏⁽⁶⁾の分類項目によって、5年毎にまとめ表示したものである。20年の間の研究発表者の量的な増加は顕著であり、研究の対象にもひろがりを見せている。即ち、19題(昭25～29)の発表が178題(昭・40～44)となり、「ダンス」「表現」の題目で行われていた研究が、「創作」「リズム」などにひろがり、かつ、この分類項目におさまりきれないとみなされた「その他」の研究(R. Laban, I. Duncan, 民族的表現、日本舞踊、能、記譜法など)が30題にも及ぶようになり、明らかに研究の対象が分化していることが認められる。

表Ⅱは、21回から28回(昭・45～50)までの研究発表を、「研究題目、目的、研究方法」から、その研究が明らかにしようとしている対象を筆者の推定により分類したものである。

全体的には、実験・実証的研究がおよそ $\frac{2}{3}$ をしめるとみられ、創作—作品—鑑賞「運動技術」に関する研究が多く、特に近年は、「創作過程」の研究から、「イメージと動き」や「作品評定」に関連する研究方向にむかっている

表Ⅱ 研究文献分類(日本体育学会発表) —昭和45～52年—(大会号資料より分類筆者)

内容	昭和年次											計
	45	46	47	48	49	50	51	52				
演技	身体演技者											5
舞踊	美・論比較文化											17
舞踊史	芸術民俗											11
教育論	舞踊教育教材史											13
創作	創作刺激創作過程創作集団パースナリティ											22
作品	主題作品構造											8
鑑賞	空間印象イメージと動きイメージと集団作品評定											35
運動技術	表情・空間基本運動習熟動きのリズム・フレーズ											37
学習指導	民舞・民俗芸能フォーク・ダンス表現(リズム)遊び創作											31
治療	舞踊セラピー											1
音楽	創作伴奏											14
用語	概念・規定用語基準											4
発表総数	33	32	26	21	19	30	14	23			198	

とみられる。史論的な研究も僅かながら増加し、また、質的には、“用語研究”“セラピー”“鑑賞基準表”“創作集団”“比較文化”などの研究も表われ、より詳細に分化しつつ研究が行われていることが認められる。

研究主題と研究法 — 原著 —

表Ⅲは、「体育学研究」が原著論文として採択した論文から、舞踊関係とみなされるものを抽出したものである。(昭・27～51)。表Ⅰ、表Ⅱのように、これらの原著論文

表Ⅲ 「体育学研究」日本体育学会<原著>
— 舞踊に関するもの — (S. 27～51) (抜すい筆者)

年代	巻号	研究題目	研究者
1 昭・27 29		移動運動の表現的意義に関する実験的研究	渡辺江津
2 同 33	3-3	学校ダンスのエネルギー代謝について	渡辺俊男 只木英子 ^他
3 同 36	5-4	学校ダンスの運動学的研究	小野 勝 只木英子
4 同 38	7-3	日本民謡のエネルギー消費量に関する研究	本間茂雄 小川新吉 ^他
5 同 40	9-2	舞踊の創作・鑑賞能力の発達に関する研究	松本千代栄 相場 了 ^他
6 同 41	11-2	舞踊における発想・表出およびそのコミュニケーション	渡辺俊男 川原ゆり ^他
7 同 42	12-1	舞踊創作段階の研究—舞踊創作における伴奏音楽の問題	村浦とく
8 同 43	13-1	女性像の変遷と女子体育についての研究	松本千代栄 川口千代
9 同 44	15-3	リズム反応の発達の研究—「同期」を手がかりとして	徳田久子
10 同 51	20-4	幼児のリズムパターンへの同期に関する発達の研究	岡野清里 丹羽 昭
11 同 51	21-2	作舞と演舞	藤沢史枝
12 同 51	21-2	舞踊認知の因子分析的研究	金城光子 大城宜武

文にも明らかに研究の推移をみる事ができよう。

論文1は、平面的移動運動がもつ表現的意義をみようとしたもので、課題と課題なしの設定で、移動の軌跡がどのように異り、それらが快・不快・中性、緊張・弛緩・中性の情調とどうむすびつくかをみて、移動運動自体の中に潜在する心理的条件を究明している。

論文2は、学校ダンス(コマの動き、みのり他10作品)のエネルギー代謝を測定したもので、エネルギー代謝率R.M.R.と酸素需要量によって、ダンス作品(2分～約3分)を運動強度の視点から分析している。

論文3は、学校ダンス作品(荒城の月変奏曲他9曲)を身体の重心位置を推測し(松井秀治の係数による)キ

ネシオロジの面から表現技術の難易、表現内容等との関係を解析している。

論文4は、日本民謡(春駒、阿波踊り、佐渡おけさ他38種目)をレコード一曲の長さ単位として、エネルギー代謝率を算出し、労作強度別に分類考察している。

これら論文2、3、4は、いづれも生理学・力学の実験方法を用い運動効果の側面からダンス教材の位置づけをみようとしているものとみられよう。

論文5は、舞踊の創作および鑑賞の機制を課題を与え創作させた“作品”と“創作過程”の分析、同作品の“鑑賞の価”(動きの感情価)を比較検討し、表現とそれらの伝達の様相をみた結果を報告している。同一課題、同一被験者を3年間(10ヶ月毎)追跡し、観察及びフィルム分析、鑑賞用語選択、内省などの研究方法によって、その変化、発達をみたものである。

論文6は、舞踊の創作及び鑑賞における精神活動を、皮膚電気反射、脳波、呼吸曲線および筋電図によってとらえ、創作過程における各期の変化、創作者と鑑賞者の精神興奮の類似傾向などをみている。従来の研究に附加して、舞踊を客観的側面からとらえようと意図したものである。

論文7は、音楽刺激によって、舞踊イメージがどのように構成されるかを実験的にみたものである。音楽構造をA(のどかな明るい感じ)、B(暗く寂しい感じ)、C(不安定な激しい感じ)にかえて、その関係をみている。

論文8は、女子の理想像と体育内容に関する実態調査によって、身体的、精神的側面から運動の種類による価値意識の差異を明らかにし、“強い意志、美意識の洗練、創造力の豊かさ、優雅な身のこなし、人間関係の円滑”を望む女子の理想像と、ダンスに期待する価値観の類似性を実証している。

論文9は、刺激音に対する反応動作(手)をみた実験研究で、幼児(2才～6才)が、リズム・パターン(9種)を同期できるようになる発達の様相を明らかにしている。

論文10も同様の方法で、手のリズム反応をみているが、全体と部分の認知の観点から実験を設定し、A・B群の学習法をかえ、結果として、パターンの全体的把握の学習がより有効であるという結果を提出している。

論文11は、舞踊における「作」と「演」について考察し、作舞、演舞の差違について、語義、特性を対比しつつ、「演」を再見し、作舞(創造活動)、演舞(追創造・活動)と二次的視せず、演舞者の独自世界の認識に論点をおいて究明している。

論文12は、舞踊の鑑賞の構造を因子分析的方法によって推定しようとするもので、40の舞踊作品(国際女子体育会議(東京)収録フィルム — :日本女子体育連盟)を、40個の対極形容詞からなる意味微分尺度でチェックさせ、因子分析を行い、評定因子を見出そうとしている。

この他、舞踊に言及している原著論文では「米国の大学における一般体育実技授業の現状に関する研究」(英文)「ルキアーノスの「アナカルシス」における体育論につ

表Ⅳ 「体育学研究」「大学研究紀要」にみられる
舞踊名・人名(昭・25～52)
(谷村:研究文献分類資料より 表作成筆者)

(総称)	ダンス 舞踊	学校ダンス 教育ダンス 体育ダンス	(文化論)	アリスト テレス クルト・ ザックス J.マーチン
(創作)	創作舞踊 創作ダンス 現代舞踊 モデルネ・ ダンス フォーク ダンス 民踊 民舞 民俗舞踊 おどり 舞踏 (ワルツ)	唱歌遊戯 行進遊戯 遊戯 ジムナスティ ーク・ダンス 表現遊び リズム遊び リズム運動 自由表現 創作	(実践論)	ボーデ ラバン ダルクローズ 世阿彌
(民俗)	Card ポーランド 舞踊 ユーゴスラ ビヤ舞踊 インド舞踊 ソードダンス 日本民踊	舞楽 日本舞踊 琉球舞踊 伝承舞踊	(舞踊家)	ヴィグマン ダンカン ロイ・フラー
(民族)			(舞踊教育)	ギルバート 井口あくり 白井規矩郎 三浦ヒロ マヤ・ レックス

いて⁽⁸⁾」などがあり、舞踊研究に見のがせない。

以上の研究を研究方法上からみると、すでにみたように実験実証的研究法によって、操作的に実態を解明しようとする方向が顕著であり、表Ⅳにみるように各種の舞踊をとらえ、学会各部門(原理、歴史、心理、生理、測定評価、体育方法など)にその研究がひろがっている点に特色を見出すことができる。舞踊という運動文化の特性に加え、体育学研究法の開発、研究者のポスト上の方向などからの結果であろうか。これらの研究上の多彩な成果は、必要な追試を経て集積されたとき、舞踊と舞踊教育はある確かな指標をもつに至ると思われる。

海外の研究動向

ここで、舞踊研究の動向を、眼を転じて比較してみよう。アメリカ主要大学の学位論文(Xerox Univ. Microfilms 所収)の体育学分野、959 題目中(1940～1973)舞踊関係は50題を越え、特に1965年以降に急増している。モダンダンスを対象とした論文題目は、「L. Horstのモダンダンス創作理論」E. Pease(1953)、「J. Martinの舞踊評論—舞台芸術舞踊に対する彼の評論方法の研究」T. Herthel(1966)、「モダンダンスへの適用としての2つの美学理論の比較」M. Kaprelian(1969)、「美的規範としてのモダンダンス・コレオグラフィの検証」P. Rowe(1966)などがみられ、カリキュラム、創造性など教育側面からの論文は、「高校モダンダンスの初歩教育における視覚的助成」L. Carter(1958)、「高校女子のダンス計画の確立と指

導のための原理」M. Calhoun(1963)、「運動能力テストを通してのモダンダンス能力の考察」P. Frial(1965)、「選ばれた局面でのダンス・ムーヴメント・シーケンスの学習経験」B. Bowman(1971)、「大学女子の運動適性に対する初級モダンダンスの貢献」J. Hays(1971)、「モダンダンスにおける創造性開発に関する思考」A. Little(1966)などがみられ、また、舞踊を民族あるいは文化史的にみた論文ではトンガの舞踊構造(1967)、パナマのフォークダンス(1964)、ソ連の舞踊芸術・政治・イデオロギー・文化研究(1967)、18世紀初頭のイギリスのダンス(1967)、アメリカ・スクエアダンスの文化的歴史的哲学的研究(1973)などがみられ、70年以降になっては、1961～65年大学(短・総)卒業の舞踊専攻生の職業型(1970)、舞踊学科設立の基礎としてのアメリカ短科・総合大学における舞踊課程の研究(1970)など、アメリカ大学教育の中の舞踊の位置と成果を追跡する論文もあらわれ、ウィスコンシン大学を創始とする大学における舞踊研究・教育の層の厚さをみる事ができる。あわせて、バレエ作品の分析(1970)、V. T. R.による舞踊の要素分析(1970)など現象分析、ダンスと運動セラピー(1970)や女囚の素行へのダンスの影響(1961)など、治療面での研究、また音楽と舞踊、ダンス・プロダクション、用語研究など、人間と舞踊のかかわるところ、すべてに研究視点がひろげられている。

前述のP. Roweの論文は、過去および現在のアメリカのコレオグラフィの領域を検証し、ダンスのコレオグラフィを限定する原理を、それに関連した美学、心理学的条件と対応して探究し、構造化しようとしたものである。現代のモダン、過去のモダンを必然的に内包して、今日的に出現するというみかたに立つて、Traditional Choreographers (M. Graham, D. Humphrey等4名) Innovator (A. Sokolow, P. Tayler, E. L. Hoving等5名) Avant-garde (A. Nikolais, E. L. Hawkins等4名)、に他の諸傾向(The Judson Church Groupなど)に分類しコレオグラフィ情報を文献上に収集、W. Williamsの作品分析方法やG. AllportやS. Cookらの個人・社会心理学的研究方法をふまえて、美的傾向を検証し、コレオグラフィのフレ임・ワークをもとめ、創作者に役立つ美的規範を検出し構造化したものである。かつて、M. H'Doubler⁽⁹⁾が、その深い生理—解剖学、物理—運動学的洞察から「舞踊研究に最も重要で、しかも最も永続している刺激を与え」(P. Rowe)たように、今日のアメリカ・モダンダンスが他の諸芸術に比肩する規範を持つべきであるとみて、舞踊を「精神を内包する運動と、運動それ自身によって、それ以上たらしめようとするもの」との両極のベクトルをもって迫る彼女の美的規範の提出は、示唆に富み、興味深いものである。

ちなみに、P. Roweが主任教授として在職するニューヨーク大学には、アメリカの舞踊学会(The Committee on Research in Dance)の事務局がおかれている。機関誌CORDは1969年次来出版され、Vol. IX-2(1977)には、毛越寺の延年(F. Hoff)や日本舞踊の伝承(J. R. Malm)、中国の舞踊記譜に関する論文などがみられ、Vol. VIII-1に

は先のM. H' Doublerのダンス学習法を再見する論文もみられる。

アメリカでは、他に研究誌“Research Quarterly”にもダンス関係の研究報告がみられる。また、日本の体育関係月刊6誌とともに“Dance Magazine”や“Journal of Physical Education and Recreation”なども研究と教育現場の交流としてみなければならぬだろう。更に、民族舞踊と音楽関係では“Ethnomusicology”をみなければならぬ。R. Labanの記譜法は、この分野にも活用され、また、記号論的なアプローチ、各国の舞踊分析が報告されている。イギリスのR. Labanの方法が運動教育としてアメリカにも導入されていることはすでに知るところであり、東西、その研究・教育の交流は興味深いものがある。

今夏The Committee on Research in Dance(前述CO-RD)とAmerican Dance Guildの共催で、“20世紀の中の伝統的舞踊——アジア・太平洋地域を中心として——”を研究主題と掲げた学会がハワイ大学を会場に開催される。日本からの演者も招かれている。アメリカ現在の舞踊研究・教育の発展を、舞踊家、舞踊研究・教育者、批評評論家の一体の活動、大学教育への位置づけ、文化に対する経済的支度度などの総合成果としてみると、日本の「舞踊学」のこれからにあらためて思いいたさざるを得ない。

舞踊と舞踊学の発展をねがいつつ稿を閉じる。紙数の限界と非才による不備をお許しいただきたい。

注

- (1) 明治8年、伊沢修二氏愛知師範学校附属小学校ではじめて唱歌遊戯を課し、その価値を文部省に建議する。(今村嘉雄：日本体育史)
- (2) 従来の呼称をあらため「ダンス」とし、民謡を指導してもよいことを付記した。(学習指導要綱 文部省 昭和22年)
- (3) 東京教育大学体育学部は昭和38年設置。43年省令講座となる。39年修士講座「舞踊学」設置。
- (4) お茶の水女子大学文教育学部に昭和45年設置。同47年修士課程舞踊教育学専攻設置。
- (5) 日本体育学会「体育学研究」大会発表並びに原著(昭25~昭52)
- (6) 体育学研究文献分類目録(谷村辰巳)
- (7) 体育学研究16-4(波多野義郎、西尾貫一他)
- (8) 体育学研究20-3(杉本政繁、水野忠文)
- (9) M. H' Doubler; Dance — a creative Art Experience
松本訳：「舞踊学原論」
- (10) 舞踊教育の比較研究(松本)女子体育19巻3号

舞踊学の動向

日本における舞踊研究の足跡

—日本舞踊史を中心に—

板谷 徹

はじめに

いまここで述べようとするのは、日本の近代以降に、主として近世までの日本の舞踊を対象とした舞踊研究の歴史とその方法である。限られた紙数の中で、右に該当するすべての研究業績を、立体的に研究史として構成することは望みうべくもない。一つの私見を示して大方の御叱正を俟ち、舞踊学の現在の足場を確認する議論の一助ともなれば幸いである。なお、小稿は吉川周平「研究の手引—『舞踊』の語と舞踊研究史—」(『日本の古典芸能』第6巻)に負うところ多く、参照されたい。また、文中、敬称はすべて略させていただいた。

舞踊学は文化現象としての舞踊を研究対象とするが、わが国においては独立した舞踊史が存在するわけではない。舞踊と舞踊的なるものの歴史があるのであって、舞踊的なるものを視野に収めなければ、到底日本の舞踊史は成立しない。それ故に、日本では芸能史の存在意義が大きく、研究としての舞踊史が積極的には要請されなかった。この芸能史一演劇史と舞踊史とのかかわりを、郡司正勝は次の言葉で述べている。

……これまで、日本の演劇の歴史と称するものの大部分は、実は舞踊の歴史だといってもあながち語彙ではないとおもう。近代劇が日本の演劇の概念に入りこんでくるまでは、舞踊的要素は芸能の最高の境地と考えられていたのである。(『おどりの美学』)

この特殊な事情の中で、芸能史のなかから舞踊的なるものを抽出すれば舞踊史が成立するかといえば、ことはさほど簡単ではない。例えば能の場合、その最も純粹に舞踊的要素である舞事を採り上げて、舞踊史の中世に位置させるだけでは事足りない。舞事を含む能全体、舞の型を含む演技体系を舞踊の立場から見直すことができなければ、能は舞踊的研究を必要とせず、また舞踊史の中世は埋まらない。

芸能史とは別に舞踊史の立場が有効かどうか、このことは日本の舞踊史研究によって自明のことではなく、まず議論されるべき課題となろう。

舞踊学事始

近代の日本における舞踊研究は、明治37年の坪内逍遙による『新楽劇論』にはじまる。厳密に言えば、この書は研究というよりは、新しい国劇樹立のための宣言—「新